

# American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第38回

## リトル・フィート 「ディクシー・チキン」

魅力的なコーラスに潜む裏の意味が楽しい



Little Feat  
"Dixie Chicken"  
Warner Bros. ©BS2686 [1973]  
➔ワーナー ©WPCR75326

がある冗談、という意味)で、セクシーな味を出しているんだ。この曲を、公園でのパーティーで歌いまくった俺たちはまだ子供だったから、ここで歌われているような出会いがしたかった。ジャケッットに描かれているような、セクシーな大人の女に騙されてみたかったんだ(笑)。

I've seen the bright lights of Memphis  
And the Commodore Hotel

▲僕はメンフィスの明るい夜景とコマドール・ホテルを見た▼。▲僕▼とは、ローウェル・ジョージのことなんだろう。実体験をもとにした曲かもしれない。この部分で使われている「bright lights」は夜景のことだが、▲にぎやかな街▼という意味で使う。「commodore」は海軍の将官という意味だから、詩に出てくる▲コマドール・ホテル▼という名前を見ると、すごく古いトラディショナルなホテルが思い浮かぶだろう。アメリカの街ならどこにでも、そういうホテルがある。例えば、サンフランシスコならクリフト・ホテルのレッドウッド・ルーム、ニューヨークならアルゴンキン・ホテ

今回は俺が高校生の頃、仲間たちと騒ぐときに必ず歌った曲だ。曲を作ったローウェル・ジョージは亡くなってしまったが、バンドが去年、来日した時には俺もライブに行った。この曲が一番盛り上がったし、やっぱり名曲だと思った。

「ディクシー・チキン」は1973年にリトル・フィートがリリースした3枚目のアルバムタイトルのトラックだった。こ

ルのような、天井が高い、壁に木がはめ込まれた重厚な部屋のイメージだ。

メンフィスにはビーボディーというホテルがあるが、詩ではそこをイメージして歌っているのだろうか。この曲を知っている人たちはコマドール・ホテルがメンフィスに実在すると思っているだろう。俺もそうだった。だが、実はメンフィス市内にはないチェーンのホテルではないが、一番近くにあるのは、メンフィスとナッシュヴィルの間にある街リンドンだ。そのコマドール・ホテルは1939年の開業時はステイリール・ホテルという名称だったが、2007年にリニューアルしたとき名前が変わったのだろう。そのホテルのオーナーはロードアイランド出身で、自分と同じ州の出身である海軍の将官オリヴァー・ハザード・ペリー(米英戦争のヒーロー)にちなんで付けたという。ロードアイランド州はハワイの5分の1ほどの面積しかなく、アメリカで一番小さい州だ。オリヴァー・ホテルと名付けなかったところを見ると、コマドールと言えばオリヴァー・ハザード・ペリー、くらい有名な人物なのかもしれない。ホテルの話が長くなってしまった。

And underneath a street lamp  
I met a southern Belle

▲そして、僕は街灯の下で南部のお嬢様に会った▼。この「southern belle」は、南北戦争前の、富裕層で未婚の「箱入り娘」を指す。綿のプランテーションがあった、南部でもより南にあるエリアに住む彼女たちは、当時の最先端のお洒落にこだわり、できるだけ太陽に当たらないような生活をしてきた。つまりは『風と共に去りぬ』のスカレット・オハラのような女性のことだ。太陽に当たる人たち、と言ったらワールキング・クラスのことだからね。

Well she took me to the river  
Where she cast her spell  
And in that southern moonlight  
She sang the song so well

▲彼女は僕を川に連れていって、呪いをかけた。そしてその南部の月明かりの下で、彼女は上手な歌を聴かせてくれた▼

(chorus)

If you'll be my Dixie Chicken  
I'll be your Tennessee Lamb  
And we can walk together  
Down in Dixieland  
Down in Dixieland

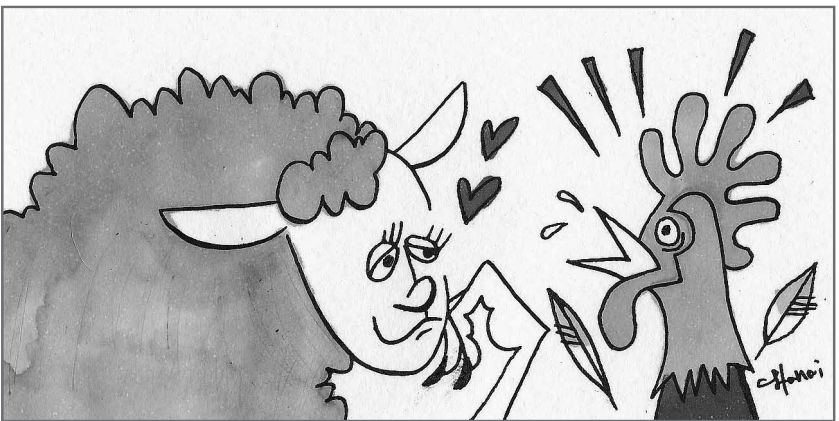
▲あなたが私のディクシー・チキンになったら、私はあなたのテネシー・ラムになる。そうしたら、二人でディクシーランドを歩けるわ▼。先に触れたように、ここでローウェルは、ちよっとエッチなニュアンスのある言葉を豪華なメンバーのコーラス隊に歌わせているんだ。「chicken」は鶏、鶏のオスはコック、そしてこの言葉はスラングでペニスを意味する。また、「lamb」は子羊だが、羊はもう一つのことを仄めかす。羊のプッシュは人間のそれに似ていると言われ、昔から羊とセックスする話によくある(フロリダでは2011年に獣姦を禁止する法律を作ったくらいだ。なんと一昨年のことだ)。つまりは、女性から男に誘いをかけているわけなんだ。

Well we made all the hot spots  
My money flowed like wine

▲僕たちはあらゆる盛り場を徘徊した。僕のお金は、ワインみたいに流れ出ていった。この店の 'made' は、出かけたとか遊びに行ったという意味で使われている。'hot spot' は、流行っているレストランやバーのこと。二人で遊び過ぎて、男は、湯水のように浪費してしまったようだ。

And then that low down Southern  
Whiskey  
Began to fog my mind

▲そして、あの最低な南部のウイスキーが僕の頭に霧をかけてしまった。ボズ・スキヤックスの名曲でも有名なこの 'low down' は、さうさうと使える言葉で、例えば最低な男 = 'low down guy' や、最低な女 = 'low down girl' とらった表現もある。'Southern Whiskey' とは、サザン・カンフォートやジャック・ダニエルのこと。'fog my mind' の 'mind' は「心」というより「頭」の意味で使われている。安酒の飲みすぎで記憶が曖昧になり、自分が何をしているのか分からなくなってきたということだ。



And I don't remember church bells  
Or the money I put down  
On a white picket fence and boardwalk  
Of the house at the edge of town

▲教会の鐘の音も、街外れの家の白い木のフェンスと遊歩道にお金を払ったこともまったく記憶にならんだ。この 'church bells' = 鐘を鳴らすとは、主人公の男が南部娘と結婚してしまったことを意味する。'money I put down' は、頭金を払ったこと。'white picket fence' はアメリカの田舎に多い白い木で作られている垣根。幸せなイメージがあるので、よく使われる言葉だ。'boardwalk' は、家の回りに張ったデッキのこと。結婚をきっかけに、男が新居に相応しくするため自宅に金をかけた、ということなんだろう。

Oh boy do I remember  
The strain of her refrain  
How the nights we spent together  
And the way she called my name

▲でも、覚えているよ！ 彼女の一生懸命な歌を。

命な歌を。'refrain' は曲でリピートする部分。'strain' は無理をすること。つまり、彼女は一生懸命歌っていたという意味だ。▲それから、僕たちが一緒に過ごした夜に彼女が僕の名前を呼ぶときの、呼び方も覚えてるよ。

(chorus) 前回と同  
Well it's been a year since she ran  
away  
Yes that guitar player sure could play

▲彼女がいなくなつてから1年も経ってしまつた。あのギター・プレイヤーは本当にうまかつた。はつきり言っていないがローウェルは他のギターリストに彼女を取られてしまつたようだ。▲本当にうまかつたとは、ギター・プレイのことだけでなく、女を横取りする技術にも長けていた、という意味にもかけているんだらう。

She always liked to sing along  
She's always handy with a song

▲彼女はいつも一緒に歌うのが好きだつた。

たし、いつも器用に歌っていた。ここでこの 'handy' は、器用という意味。例えば、'Handy with a hammer' はトンカチを器用に使う、つまり大工仕事がうまいという意味だ。

Then one night in the lobby  
Of the Commodore Hotel  
I chanced to meet a bartender  
Who said he knew her well

▲それからある夜、僕はコマドール・ホテルのロビーで、彼女のことをよく知っていると、というバーテンダーに偶然会つたんだ。'lobby' と歌っているが、きつとロビーにあるバーだろう。'chanced' は、偶然のこと。ローウェルはこのバーテンダーに彼女のことを話したんだらう。

And as he handed me a drink  
He began to hum a song  
And all the boys there at the bar  
Began to sing along

▲バーテンダーが僕にドリンクを渡しながら、

から、鼻歌を歌い始めた。すると、バーに座っている男たちが皆いっせいに、彼女がよく歌っていた曲を歌い始めた。ここでは 'boys' と言っているが、これは男の子ではなくて、スラングで「大人の男」のこと。▲みんな歌い始めた」という部分で、なんとそのバー・カウンターに座っていた男たち全員が、この南部娘にたまわっていたことを表現している。

(chorus) 前回と同

ローウェル・ジョージはこの曲で、たぶん自身のグループ・ピー体験を歌っているんじゃないかと思う。だって、彼女を奪った男は、ギターリスト、だつたと詩にあるしね。そして、その女性が、このアルバムのジャケットにあるような 'southern belle' だつたのかもしれない。

ちなみに昨年、活動を停止してしまつたカントリー・バンド・ディクシー・チックスは、この曲からバンド名を取つたという 'chicks' にしたのは、'chick' に「女の子」という意味があり、バンドが女性3人組だつたからだ。